

# 葉の言と もとにも

うちだ かつやす  
内多 勝康



1963年東京生まれ。東京大学教育学部卒業後、NHKに入局。30年間アナウンサーとして「首都圏ネットワーク」「NHKスペシャル」「クローズアップ現代」等のキャスターを務め、阪神淡路大震災や東日本大震災の緊急報道にも携わる。2016年にNHKを退職し、国立成育医療研究センターに新設された、医療的ケアが必要な子どもと家族のための短期入所施設「もみじの家」のハウスマネージャーに就任。社会福祉士の資格を持つ。今夏、ミネルヴァ書房より「医療的ケア」の必要な子どもたちを上梓。

## 『責任の先送り』

この夏は、四国・徳島の風物詩「阿波おどり」が、赤字問題で大きく揺れた。主催団体の4億円を超える累積赤字が発覚し、そのおどりで実行委員会が中止を宣言した「総踊り」を踊り手グループが独自に実施するという前代未聞の事態だった。毎年、赤字を計上しながら、その対策を後回しにしてきた長年の「ツケ」が回ってきたと指摘されている。

私は、このニュースに触れて、やはりこの夏に発覚した「中央省庁による障害者雇用率の水増し」とイメージがダブるのを感じた。まったく畑違いのニュースではあるが、同じ根っこを持っているのではないかと思えてくるからだ。この問題も、雇用する障害者の数を長年にわたって水増ししてきたという。つまりそこには「責任の先送り」という共通項が浮かび上がるのである。

常態化することで感覚が麻痺し、見るべきことが見えなくなってしまうのか。あるいは、前任者が問題視しなかったことを口実に、その悪習を無批判に踏襲することで思考停止に陥るのか。いずれにしろ、その負債は雪だるま式に膨れ上がり、不信や混乱、イメージダウンといった、深刻な社会的損失を残すことになる。

と、ここまででは、まるで評論家のように、上から目線になってしまった。後半は謙虚に、足元の問題を見つめてみたいと思う。

私は一昨年の春、30年間アナウンサーとして勤めたNHKを退職し、国立成育医療研究センターの医療型短期入所施設「もみじの家」のハウスマネージャーに就任した。対象とするのは、主に人工呼吸管理や痰の吸引などの医療的ケアが必要な子どもたちだ。

その子どもたちは、医療的ケアが必要だという理由で、ほとんどの場合、保育園に入れない。親と一緒にいられず学校に通えない。だから、母親は仕事を辞めざるを得ない。24時間続くケアは家族を心身ともに疲弊させ、地域の中で孤立を深めていく。

長い間、わたしたちの社会は、そうした現実を「家族の問題だ」として手を差し伸べようとしてこなかった。果たして、それで良いのだろうか。「医療的ケアがあるんだから、仕方ない」とフタをしてしまうことに正当性はあるのか。

このままの状態を放置することは、まさに「責任の先送り」となり、前半に記した2つの問題と同じ過ちを犯すことになる。私は思う。改めるべき事実が目の前に現れ、解決すべき課題と向き合った時には、速やかに正しい方向へ舵を切らなければいけない。それが、傷口を広げない唯一の処方箋だ。

このコーナーでは、著名人の方々に、大切にされていることについて寄稿いただきます。内多勝康さんは、10・11・12月号に登場いただきます。

# 言葉の葉とともにもと

うちだ かつやす  
内多 勝康



1963年東京生まれ。東京大学教育学部卒業後、NHKに入局、30年間アナウンサーとして「首都圏ネットワーク」「NHKスペシャル」「クローズアップ現代」等のキャスターを務め、阪神淡路大震災や東日本大震災の緊急報道にも携わる。2016年にNHKを退職し、国立成育医療研究センターに新設された、医療的ケアが必要な子どもと家族のための短期入所施設「もみじの家」のハウスマネージャーに就任。社会福祉士の資格を持つ。今夏、ミネルヴァ書房より「医療的ケア」の必要な子どもたちを上梓。

## 子どもに叱られない社会にしよう

「ポーッと生きてんじゃねえよ！」

最近、5歳の女の子に、こんな風に叱りつけられる大人たちが増えてきている。NHKの「チョコちゃんに叱られる！」をご覧になっていない方にはチンプンカンプンと思われるので、まずは解説から。

簡単に言うと、「イライラするのデラッってなに？」

「カスタネットはなぜ赤と青なの？」といった素朴な疑問を5歳のチョコちゃんが出演者のタレントたちに投げかけ、うまく答えられないでいると、冒頭の決まり文句で叱り飛ばすという雑学バラエティー番組。テレビの前で見ていると一緒に叱られてしまうことになるが、叱られるのを覚悟で、というよりも、むしろ叱られるためにわざわざテレビにかじりつく大人たちが増えていくというのだ。かくいう私もその一人で、今や毎週楽しみに録画して欠かさず叱られている。

この番組に親しむようになってから、私は医療的ケア児と接していると「ポーッと生きてんじゃねえよ！」と言われていたような感覚に陥ることがある。もみじの家を利用するのは言葉が話せない子どもたちがほとんどだが、話すことができたなら、きっと大人たちを思いつきり叱り飛ばすに違いない。そんな風に思ってしまうのだ。

それはきっと、わたしたちの社会が、全国に1万8000人以上いると言われる医療的ケア児と家族たちに十分な支援を保障できずにいるからである。「重い病気や障がいがあると安心して暮らし続けられないのはなぜ？」と素朴な問いを突き付けられ、明確な答えがでずにマゴマゴしている大人たちは、子どもの純粋な眼から見れば、いくら言い逃れをしても「ポーッと生きている」と映るに違いない。

先日、医療的ケアが必要な娘を育てる母親から連絡をもらった。最近体調を崩し、親戚の手も借りられない。治療に行くことすらできないまま深夜早朝もケアが続く、いつかそのまま死んでしまうのではないかと思うという、極めて深刻な状況が綴られていた。そんな母親の姿を間近に見て、子どもはどんな気持ちでいるだろうか。今も全国各地で、同じような境遇に追い詰められた家族が苦しんでいる。このような家族の危機を見逃していることは、先進国と言われる日本として恥ずべきことではないのか。

一刻も早く、医療的ケア児と家族を社会で支える新しい仕組みを整えることが必要だ。子どもたちに「ポーッと生きてんじゃねえよ！」と叱られないようにするために。

◆このコーナーでは、著名人の方々に、大切にされていることについて寄稿いただきます。内多勝康さんは、10・11・12月号に登場いただきます。

# 言葉の葉とともにもと

うちだ かつやす  
内多 勝康

1963年東京生まれ。東京大学教育学部卒業後、NHKに入局。30年間アナウンサーとして「首都圏ネットワーク」「NHKスペシャル」「クローズアップ現代」等のキャスターを務め、阪神淡路大震災や東日本大震災の緊急報道にも携わる。2016年にNHKを退職し、国立成育医療研究センターに新設された、医療的ケアが必要な子どもと家族のための短期入所施設「もみじの家」のハウスマネージャーに就任。社会福祉士の資格を持つ。今夏、ミネルヴァ書房より『「医療的ケア」の必要な子どもたち』を上梓。



## 希望がかなう街かなわない街

今、医療的ケア児の通学をめぐる、裁判が進行中だ。人工呼吸器を付けた川崎市の児童と両親が、重度障害を理由に就学先を特別支援学校に指定されたのは違法だとして、市と神奈川県の教育委員会を相手取り、希望通り地元小学校への通学を認めるよう求めている。

医療的ケアへの社会的関心が高まり、埋もれていた家族の声が表に出てくることで、これまでの慣習との摩擦が生じているのだ。

一方で、これとは正反対の話を、先日聞くことができた。話の主は、埼玉県東松山市の社会福祉協議会の女性相談員だ。

彼女によれば、東松山市には「就学相談に関する規則」があり、第1条には、こう謳われている。

「この規則は、就学予定者、児童及び生徒の就学先等の選択にあたり、保護者等への適切な就学の相談及び支援を行い、共に育ち、共に学ぶ教育の推進を図るため、必要な事項を定めるものとする」

平成19年に定められた、インクルーシブ教育を基本理念とするこの規則が、東松山市の大切な約束事として機能している。障害のある子についても、家族の通学先の希望に教育委員会の就学相談調整会議のメンバーが原則同意し、障害の有無を理由に、「この子はここの学校、あの子はあちこの学校」と機械的に振り分けることはしないことが継続されているという。

さらに、女性相談員は、信じられないようなエピソードも教えてくれた。

平成21年春、新聞では「特別支援学校生、急増」「教員・教室足らず」と報道されていた。しかし、驚くことに、東松山市ではその年、特別支援学校を選んだ新小学一年生がゼロになるという、奇跡的なことが起こっていたという。

同じ関東地方に暮らしていても、教育委員会の対応次第で子どもたちの学びの環境が大きく変わってしまうことに、やりきれない矛盾を感じる。触れ合う時期が早ければ早いほど、子どもたちは違和感なく、お互いを受け入れることができるだろう。住み慣れた地域で幼なじみと一緒に遊び、学び、障害のあるなしにかかわらず、共に成長したいという希望を実現できるかどうか、これほどまでに格差があるのが、今の日本悲しい現実だ。

女性相談員が長年かかわっている、医療的ケアが必要な男子高校生は、幼少の頃から地域の中で育まれた。今は、ピアノの調律師として社会へ羽ばたく道を順調に歩んでいる。彼の家族は、嬉しそうにこう話しているという。

「すべての始まりは、地元の保育園へ入園できたことでした」

◇このコーナーでは、著名人の方々に、大切にされていることについて寄稿いただきます。内多勝康さんは、10・11・12月号に登場いただきます。